

むかしから現代まで続く、人々の暮らし。

裾野市史 第7巻

楽しい郷土史だより 第7号

平成 29 年 12 月 裾野市教育委員会生涯学習課

裾野市史の編さん事業は、昭和 62 年から始まりました。平成 3 年、「資料編 深良用水」から発行が始まり、最終巻である「通史編Ⅱ」が発行されたのが平成 13 年のことです。このように、長い年月と多くの方々のご協力により編さんされた裾野市史は、私たちに、裾野市の成り立ちや昔の人々の生活を教えてくださいます。

最終巻の発行から 16 年たった今、改めて裾野市史を例にとり、私たちの郷土史を紹介します。

いつもの生活には、多くの気づきがありました

市史第7巻 資料編 民俗

第7巻には市民の皆さんの普段の生活が書かれています。珍しいことも、難しいことも書かれていません。現在生きて暮らしている人達が毎日の生活のなかで行っている事象を把握し、そこに裾野市域の歴史を発見しようと刊行されたのがこの巻なのです。

歴史というのは、教科書に載らない一般の人がつむいできたものでもあります。

懐かしい行事に思い出話を咲かせるもよし、新たな地域イベントのヒントを探すもよし。使い方は十人十色！新たな気づきをその手に。



どんど焼き（『葛山の民俗』より）

二番正月には団子を作って飾る...という行事を経験した方も多いかもしれません。また、サイトヤキ、ドンドンヤキ（どんど焼き）、オンベヤキなどと呼ばれる行事で正月飾りなどを燃やし、ときには団子を焼いて食べる、ということも行われています。

サイトヤキを例にとると、火の効用には次のようなものがあると言われています。「サイトヤキで書き初めを燃せば字が上手になる」、「この火で焼いた餅や団子を食べると一年間風邪をひかない」、「虫歯にならない。サイトヤキのモシジリ（燃し尻）でタバコを吸うと身体を病まない」…。皆さんが聞いたことがあるものもあつたでしょうか。

ちなみに、市史によると市域では「サイトヤキ」の呼称が比較的多いそうです。



二番正月の団子飾り（葛山）

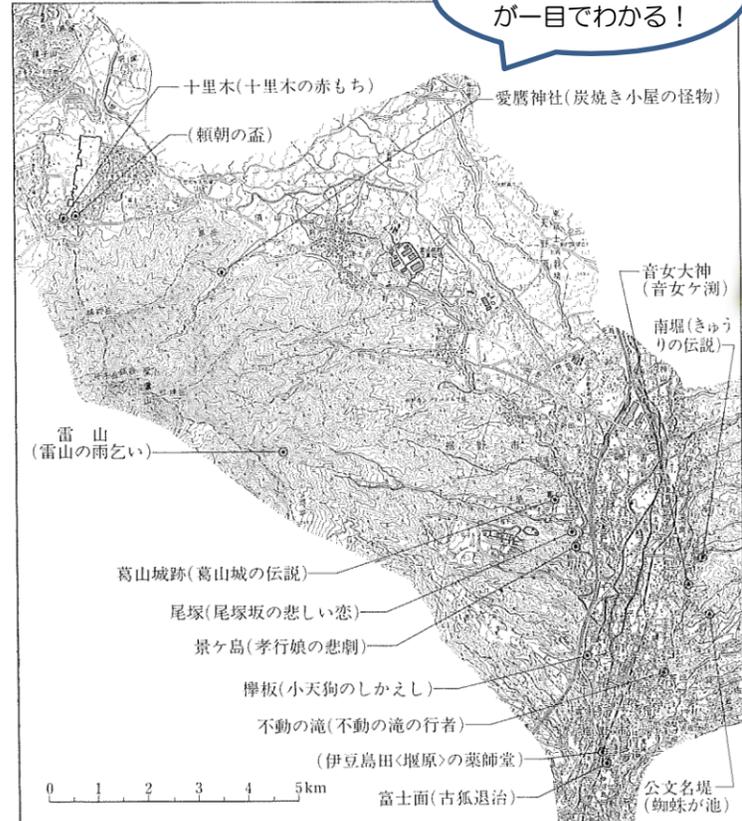
- 序章 市史と民俗
- 第1章 生活環境の民俗
- 第2章 社会と生活
- 第3章 時間と生活
- 第4章 心意と生活
- 第5章 社会変化と民俗

お問い合わせ
生涯学習センター（市生涯学習課）
住所：深良 435 番地
電話：055-992-3800

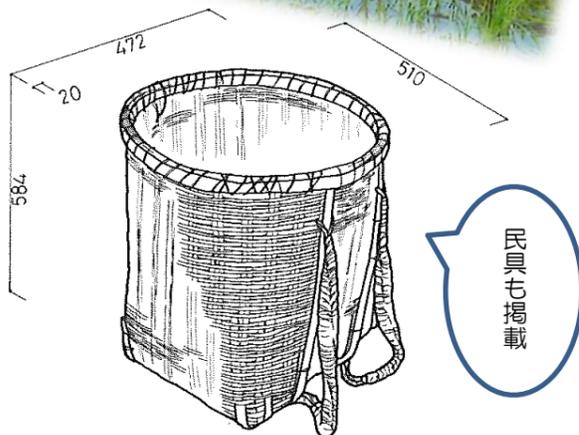
「すその阿波おどり」の成立
この商店街のイベントが行われるようになった。東日本で本場徳島に次いで有名な阿波踊りは、元商店が発案したものであるが、好評で成功を収めた。現在までにすでに四〇回を数えるほどである。十あり、大規模になっている。そして、東京都内の各北沢、新宿区神楽坂、神奈川県の大和、伊勢原、ある高円寺の阿波踊りの連の一つで、裾野にも招待された。高円寺にある語学塾の FIA の職員と生徒を中心とした阿波踊りは、この語学塾が裾野の新道に教室を開いていたので、裾野に来たときに裾野でも阿波踊りをしたが、最初から踊ることは不可能であった。最初の二

すその阿波おどりの誕生の経緯
阿波おどり駅前商店街で行われる

伝説に登場する場所が一目でわかる！



図表 4-25 伝説関係地図



図表 3-36 桑摘み用背負い籠 富士山資料館所蔵

むかしから語り継がれる、様々なものがたり

「裾野市に伝わる多くの伝説」

裾野市域には、さまざまな伝説が伝わっています。全体としては自然との関係を強調するものが多く、動物を主人公とした伝説が目立ちます。キツネ、オオカミをはじめ、カッパや天狗などの妖怪が登場する伝説もあります。動物以外にも、富士山や愛鷹山に関連する伝説も残っています。

今回は、市史第7巻の中で紹介している伝説を特集します。伝説はいろいろな形で語り継がれており、「聞いたことがある話とはちょっと違うな？」ということがあるかもしれません。また、ここで紹介する話は省略・要約している部分があります。

おとめ ○音女ヶ淵（深良）

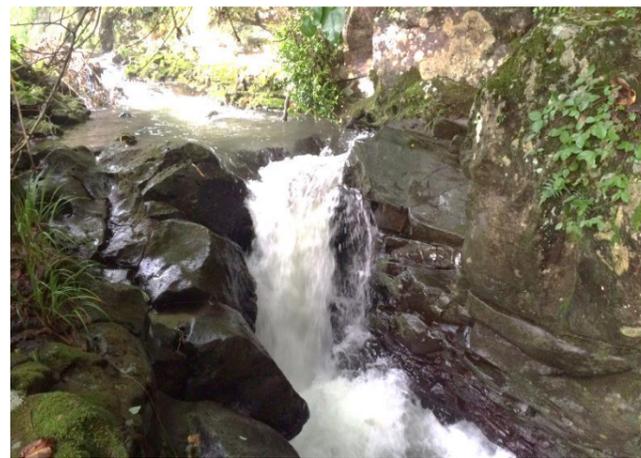
＜第一章＞昔、現在の町田の東側辺りにあった古い伝説です。川の向こう側（東）には二軒の家がありました。一軒にはいたずらばかりしている息子が、もう一軒には「とめ」という娘がいました。息子は悪いことばかりして困るのでどこかに連れていかれてしまいました。それから何日かたった後に、娘が川の淵のそばを歩いていたらカッパに足をつかまれてみるみるうちに淵にひきずりこまれ、亡くなってしまいました。二人の両親はいなかったために両家はほろんでしまいました。

＜第二章＞何百年か後に淵のそばに石屋の一家が引っ越してきてからのことです。嫁の「おりよ」が病気に苦しみました。それがとめの霊だとわかったので（とめの霊は誰も供養してくれなかったからだと言われます）、かめ吉は自分が石屋だったので自ら墓を作り、とめの霊をまつり、なんとか成仏させたのです。墓には音女大神おとめだいじんと書いてあるが、とめという名前から後に音女となったと思われます。

おりよは無事に治り、幸せに暮らしました。



音女大神



音女ヶ淵

○孝行娘の悲劇（葛山）

景ヶ島に未だ道が通じていない頃、村人は溶岩流の絶壁の割れ目を利用し、浅瀬を渡って歩きました。ある孝行な娘が家に待つ病んだ父の身を案じながら家路にいそぐ途中、恐ろしい狼に出あって、かみ殺されてしまいました。娘の帰らないのに不安を感じた父親は、病をおして探し歩いたのですが、景ヶ島の溶岩のくぼみに娘のちぎれた着物としたたるような鮮血を発見したのです。

父親は驚きと悲しみのうちに、娘の菩提を祈り、その一生をこの景ヶ島のお堂で終えたということです。後に村人が、あわれな親子の供養のため、観音像を自然石に刻み長八という大工にお堂を建てさせたことを伝えています。石のくぼみは「血の池」といって今でも血がにじんでいるように赤く見えるそうです。



景ヶ島



屏風岩

○大野原の金キツネと銀キツネ（須山）

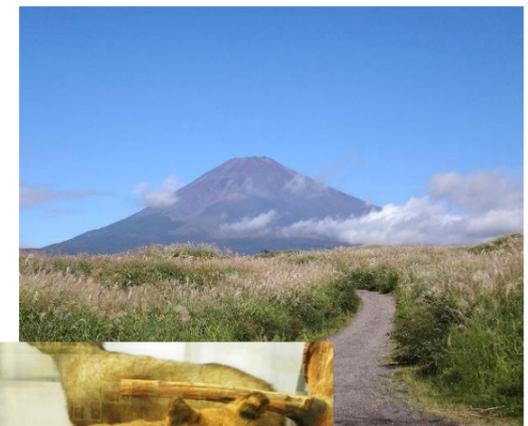
大野原が今よりずっと草深い頃のお話です。

この草原にごく気のいい金キツネと根性まがりの銀キツネが住みついていた。その頃、旅人たちは、富士から十里木、大野原を通り箱根へ通ずる街道を歩いたのでした。街道と言っても荷馬がすれちがうのがようやくの細いさみしい道でした。

銀キツネは、夕暮れ近くなると村人の姿に化けて足早やに通る旅人に声をかけたのでした。「こちらの道の方が近いですよ」…と旅人を迷路に誘いこんでは、持物から美味しい食べ物をとりあげてしまいました。一方金キツネは、迷子になった旅人を村里まで送りどけたのです。旅人は美味しいものは奪われてしまい、御礼をしたくも何もありませんので、金キツネはいつも貧乏くじをひいていました。

ある日のできごとです。草原が大火事に見舞われました。気のいい金キツネは、友だちの銀キツネに早く知らせようとしたのです。銀キツネはすっかり眠りこんでいました。余りにもタラフク食べ過ぎて逃げるできませんでした。

しばらく経って、銀キツネが焼け死んだ跡から木が生え大きく伸びていきました。里の人々は、そこを今でも“石の神”と呼んでいるそうです。



↑大野原



←キツネの剥製
(富士山資料館所蔵)

次号の『楽しい郷土史だより』は、市史第8巻通史編Ⅰ、第9巻 通史編Ⅱの内容から特集する予定です。

編集・発行 裾野市生涯学習課 文化・スポーツ室 / 深良 435 番地 / TEL055-992-3800

当パンフレット『楽しい郷土史だより』は、市役所、生涯学習センター、鈴木図書館、市民文化センター、ヘルシーパーク裾野に配架しています。また、市ホームページでも公開しています。